
天まで届く

ラズリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天まで届く

【Nコード】

N5764J

【作者名】

ラズリ

【あらすじ】

赤坂海斗は平山大牙と闘いを続けていた。

魔物との闘いが多く、その戦いはずっと昔から……行われていた。

海斗と大牙は巻き込まれていくことになることをまだ知らない。

世界の命運を決める戦いは近づきつつある。

海斗と大牙

砂漠の中を二人の男がゆっくりと周りを警戒しながら歩いていた。

「大牙、下にいる気がするんだけど」

「海斗もか？」

地面がぐらぐらと揺れ、二人の真下から石でできた腕が上がってきた。

左右に跳び、上がってくるのを待った。

「標的か？」

大牙が聞くと海斗がポケットから二つ折りにされた紙を開いた。

「ロックゴーレム」。合ってるよ」

背中に背負った大剣を大牙は前に構えた。

「んじゃ、さっさと終わらせて帰るべ！」

紙をポケットに戻し、嵌めていた指輪が二つの銃に変わった。

「そっだね」

「今回は双銃か？」

「大牙が頑張ってくれそうだし」

「OKOK。俺が頑張ればいいのな」

大牙は砂の地面を蹴って走り出した。ロックゴーレムの右のストリートをかわし、その腕に大剣を切り上げた。

「かつてえ〜〜！」

「石で出来てるんだから当然だよな」

海斗はロックゴーレムの右肩に跳び乗り、肩の関節を狙って双銃を連射するために構える。

銃口からは赤い弾丸が放たれた。

「大牙！そこどいて！」

二人はロックゴーレムから距離を取る。放たれた赤い弾丸は肩にめり込む、停止していた。

「3、2、1……………」

ロックゴーレムの右肩が爆発し、腕が砂の上に落下した。

「海斗、意外と頑張ってないか？」

「そんなことないよ。ほら、さっさと倒す！」

「はいはい」

大牙が持っていた大剣が炎を帯びる。その炎は刀身よりも長く伸びた。

「切れ味は悪いけど、焼き尽くしてやるよ！」

大牙はロックゴーレムの身体を炎で切っていく。だが切断しているわけではない。

切られた場所は少しずつ溶け始めていた。

ロックゴーレムの攻撃をかわしながら切った跡を残していく。

「そんな単調な攻撃じゃ当たらないね！」

大牙はロックゴーレムの背中から炎を伸ばし、突き刺した。

「炎陣」

炎がロックゴーレムの全身を包み込んだ。抵抗するように左腕を振り回すが、大牙には当たらない。

海斗は深呼吸し、地面に両手をついた。

「手伝うよ。風陣」

周りの炎が風でロックゴーレムに回転しながら押し付けられていく。

数秒後、ロックゴーレムは燃え尽き、焦げた身体の一部だけが砂の上に転がっていた。

「任務完了つと」

大剣を背中に戻しながら海斗の側に寄って行く。

「そうだね。じゃあ戻るうか」

砂漠の中を二人は歩き、来た道を戻りはじめた。数日後、二人はギルドという場所に辿り着いた。

「マスター、終わったぞ〜！っていないし」

ギルドの中には酒を飲む人と談笑してる人、踊ってる人がいた。

二人が向かった先は入口からまっすぐ歩いた場所にある受付。

「ロックゴーレムの依頼、完了しました」

海斗がそう言うと受付は机の下から紙を出し、ペンを渡した。

海斗がそこに記入し、それで正式に依頼が完了したことになる。

「ねえ、お姉さん。後で一緒にお茶なんてどう？」

空気を読まない男、大牙がナンパを開始した。

「海斗さんが一緒ならいいですよ？」

「俺も？……いつかね」

「だそうです」

「海斗、ちょっと身体交換しようぜ？ナンパしてくるから」

「無茶言つなよ。はい、終わりました」

紙とペンを返し、受付が確認すると報酬が入っている封筒を手渡された。

「お疲れ様です。それと、二階でマスターが呼んでいましたので向かって下さい」

「わかった。ありがとう」

「海斗、他に言うことはないのか？今日も綺麗ですねとか、デートしてくだぐおおお……」

海斗のチョップが大牙の頭にヒットし、うずくまった。

「ここ数日間、初めてのクリーンヒット……」

自分の頭を優しく摩りながら階段を上がって行く海斗の後ろをついて行った。

「海斗と大牙！待ってたぞ！ガハハハハッ！」

酒を片手に、書類を片付けている男がいた。

「マスター、話は何で「また酒飲みながら仕事してほぐうつ……何で!?!」」

今日二発目のチョップは胸に入った。

「実は頼みたい依頼があつてな。半端なやつには頼めないような依頼だ」

マスターの顔は仕事の顔に戻った。見るとまだ酒瓶の中身はほとんど減っていなかった。

「その依頼内容は何ですか？」

マスターは紙を一枚ずつ二人に配り、話を続けた。

「内容はクルス王国の王女の護衛。まあ、付き人だ」

付き人？

「それならクルス王国の兵士にやらせればいいんじゃないの？」

大牙がそう言うのと海斗は頷いた。マスターも深く二度頷いた。

「俺もそう思ったんだ。だが、話を聞いて考えが変わった。内容は王女を守るとあるが、クルス王国の全てを守れ」

「クルス王国の全て？全市民を守れってことですか？さすがに無理です」

海斗は紙をマスターの机に置いた。

たった一人の護衛ならできる自信はあった。相手が王女でも粗相の

ないようにすればいい。

でも今回の依頼はそんなレベルではない。

「何人が頼りになるやつには声をかけてある。二人だけに頼むつもりじゃない。そして、半端なやつに頼めない理由をまだ言ってない」

少し緊張気味の大牙と海斗はマスターの言葉を待った。

「クルス王国の城の地下。ある物が大切に封印されている。……………」

…「悪魔の涙」

「悪魔の涙？何それ？」

大牙は海斗に顔向けた。首を横に振り、知らないと返す。

「クルス王国にはないが、他に、悪魔の腕輪、という物がある。この二つが破壊されると、闇がこの世界を包み込むと言われている」

「責任重大ね。何で今、それが狙われるんですか？」

「封印が弱くなってるんだろうな。魔物が無意識にそこに向かってるんだ」

「封印をかけ直すまで魔物を討伐し続ける。それが今回の依頼ね。王女の護衛の理由は？」

大牙にちよつとした疑問が浮かんだ。今回の依頼はクルス王国を守ることが最重要。

王女の付き人までする必要がわからなかった。

「王女はわがままで、たまに城を抜け出すんだ。年も近いし、海斗なら面倒見れると思ってな」

「俺は!？」

「大牙はナンパばかりしてるから頼めないな」

大牙は持っていた紙を床に落とし、膝をついた。

「急ぎで悪いんだが、今から向かってもらいたい」

「了解です。大牙、行くよ？」

一礼して海斗は階段を降りて行った。

「大牙、お前が海斗を支えてやってくれ」

「わかってるよ、マスター」

膝についた埃を叩き、海斗を追った。

海斗はゆっくり歩いて大牙を待っていた。近くの駅まで進み、列車に乗り込む。

乗り込んでから数分後、列車は動き出した。

「海斗、悪魔の泣ってどんな形してるか想像できるか？」

壁に寄り掛かり窓の外を見ていた海斗は視線を大牙に変えた。

「泣って言うくらいなんだから、水晶みたいな感じだと思うよ。実物は多分見れないだろうし」

「見せてくれてって言って見られるなら守るように頼まないしな。俺らは外の警備だけかぁ……」

大牙はため息をつきながら目を閉じて眠ろうとした。

（魔物を狩るだけで済めばいいんだけどね）

今回の依頼に、嫌な予感がしていた。

ミア

城下街では人々が行き交い、買い物やデートをしている人々がいた。

「すっげー！初めて来たけど、クルス王国っていいな！」

大牙が海斗の隣から動き、人混みの中に紛れていく。

「大牙はほつとくとして、何か食べるかな」

大牙に見つからないように動き、近くのオープンカフェに入った。

ホットサンドとコーヒーを注文し、席に座った。

「海斗どこだああ！！！」

海斗の身体がびくつと震えた。大牙が人混みのど真ん中で名前を呼んでいた。

迷惑この上ない行動だった。この時、海斗は心の中で決めた。

（絶対に俺は返事しない）

恥ずかしかった。自分の名前を呼ばれることが。文句を言ってやりたかったが、我慢した。

「お待たせしましたあ！」

女性の店員がホットサンドとコーヒーを海斗の前のテーブルに並べ

た。

「ありがとう」

微笑みかけ、海斗はホットサンドを食べ始めた。一口目を噛み終わり、コーヒードで流し込む。

コーヒードをテーブルに置くと向かいの席に知らない女の子が座っていた。

「君……誰？」

「ミア＝クルス。ちょっとここにいてもいい？疲れちゃって」

「いいけど」

海斗を見つめるミアの視線が気になった。海斗は一枚のホットサンドを皿ごとミアに渡した。

「どうぞ。俺はもう要らないから」

「そう？じゃあ遠慮なく」

もちろん嘘だ。二枚ではまだ食べ足りない。でも我慢できない程ではない。

大牙に街中で名前を叫ばれるより随分マシだ。比べるだけ無駄。

ミアの食べる姿を凝視するのも悪いと思い、目を逸らす。

コーヒーを一口飲んでからミアが食べ切るのを待った。

両手を合わせて「ごちそうさま」と小さく会釈。海斗はそれを見て黙って頷いた。

「じゃあ、俺はそろそろ行くよ」

コーヒーを飲み干して席を立った。ミアも同時に立ち上がり、海斗の隣に立つ。

「少しついてってもいい？退屈で」

ミアはブロンドの長い髪を自分の手で撫でる。ミアのミニスカートの色がよく似合う女の子だな、と思った。

「途中までだよ。後で城に行かないといけないから」

「城に？何の用事？」

首を傾げてミアは尋ねた。海斗は頭を手で掻いた。

「内緒」

隠す理由も無かったが、言わないといけない理由もない。

海斗は人の流れに合わせ、とりあえず城下街を見て回ることにした。歩き始めると海斗の左腕にミアが抱き着いてきた。

「こっぴどいと言われないとナンパされちゃうの。ほら、あたし可愛いから」

会って数分の男に抱き着くのはどうかと思ったが、言葉にしなかった。

代わりに溜め息をついた。

「えっと、名前何だっけ？」

「赤坂海斗。海斗でいいよ」

「海斗はいい人そうだから。あたしの勘は当たるんだ〜」

それが抱き着いた理由らしい。誰にでも抱き着くようならまず、親の顔が見てみたいと思った。

「それでどこ行くの？」

「決めてないけど、とりあえず動こうと思ってね」

海斗がそう言うとミアは海斗の左腕を離し、手を掴んだ。

「案内するよ！お礼もしたいし」

「お礼？」

「ホットサンドー！」

ああ、と理解する。少しお腹が空いた。

迷子探しの板

海斗とミアは螺旋階段を登っている。壁にはランプが設置してあり、薄暗いながらも照らしていた。

クルス王国の象徴の一つで城の隣に建てられた通称『クルスタワー』だ。

ミアがオープンカフェから向かった場所がここだった。

「頂上までは五分くらいかな？」

頂上からは城下街を一望できるらしい。クルスタワーはこの階段があるため利用する人が少ない。

「毎回この階段を登るのはしんどいからね。俺もたまに来ればいいや」

闘いに慣れている海斗にとって、階段など苦にはならない。

無駄な物は基本身につけていないから身軽なのだ。

「あ、そろそろ頂上だよ！」ミアが軽い足取りで階段を駆け上がっていく。海斗も小走りで追い掛けた。

屋上の扉を開いて外に出ると青い空が目の前に広がった。

「凄い。高い所から見るのは違った景色が見れるね」

「でしょ！？やっぱり高い所っていいよね」

ミアアが手摺りに手をつき、下を見下ろす。

「海斗、あれ何かな？」

海斗も隣でミアアが指差した場所を見た。大牙が板を掲げていた。

『迷子を探しています。海斗というイケメンです。髪は黒く、指輪を二つ付けています』

見て身体が固まった。怒りが込み上げてくる。ミアアが苦笑いして海斗を見た。

「海斗のことだよな？」黙って頷く。今気づいて良かったと思う。長時間されてたらたまったもんじゃない。

「ミアア、先に下に行ってるよ。下の入り口で待ってて」

返事を聞かずに海斗は走り出した。螺旋階段を一気に駆け降り、クルスタワーの扉を開く。

「うわ、速っ」

ミアアが階段を下りながら扉の開く音を聞いた。急ぐように駆け足で下り始めた。

海斗は道の真ん中にいる大牙にドロップキックをかます。壁にたたき付けられる大牙を見向きもせず、奪い取った板を粉碎した。

大牙がぶつかつた壁のコンクリートが少し剥けている。が、大牙は気にせず立ち上がり服を叩いた。

「魔力で肉体強化してなかったら怪我じゃ済まないぞ!」「俺はお前以上に迷惑してただけど?それについて謝る気はないの?」

粉々に粉碎され、地面に散らばつた板の破片を指差しながら大牙を睨む。

「あははは………すみませんでした」

深々と頭を下げた。道の真ん中で。

「海斗〜!はあ、はあ。やっと追いついたよお」

ミアがクルスタワーから息を切らしながら走って来た。即座に大牙は反応し、ミアの前で右足の膝をついた。

「一目惚れしました。結婚してください」

「あたし、軽い人には興味ないの」

一蹴し、海斗に近づいた。大牙の心は石のように固くなった。

頭の中で「軽い」という言葉が幾度となく繰り返される。

大牙にとってナンパは出会い頭の挨拶に過ぎない。相手がノリでOKしてくれば先がある。

ほとんどの女性は無視や拒否をする。大牙も軽い人には興味がなか

った。

見た目でチェックし、ノリでOKせず、なおかつ考えて付き合ってくれる人を目下搜索中なのだ。

「海斗ならいいんだ……」

「大牙、城行くよ」

立ち上がり、大きな溜め息をついた。

(この世の人間をもっと平等にするべきだ)

「じゃあ、あたしは別行動するね！海斗、またね！」

「ああ」

「がーん」

ミニスカートを翻し、人混みに消えていった。

「野郎二人の何が楽しいんだ……」

「先行ってるから、早く来いよ」

大牙に一声かけ、海斗はクルス王国で一番でかい建物の城に向かって歩き出した。

我が儘な王女様

門兵に話をつけ、二人は城の中に入る。中を真つすぐ進み、中央階段を上がつていく。

人は少なく、入り口の門兵を含めて数人しかいない。海斗はクルス王がどこにいるかを聞き、謁見の間に向かった。

「パパ、だから護衛は要らないってば！」

謁見の間に入ら直前、中から声が聞こえた。女の子の。

「私はお前が心配なんだ。頼むから言うことを聞いてくれ」

落ち着いた声。恐らくクルス王だろう。険悪な雰囲気がある。

「タイミング悪かったな！護衛拒否られて」

大牙はものすごく嬉しそう。頭の中で王女を美化していた。見たことではないが、大牙の中では美女となっている。

「拒否られても仕事だし。我慢してもらわないとね」

海斗は謁見の間に入るための扉をノックした。

「入れ」

クルス王らしき声を聞き、扉を開けて一礼した。

「あ、海斗！」

頭を上げるとクルス王の隣にミアアが驚いたように海斗を凝視していた。

「ミアア？」

驚きつつ、海斗と大牙はクルス王の前まで歩いて行く。大牙が冷やかすように海斗を肘でつついた。

「こりゃ運命だな。良かったじゃん」

ミアアと会えたのは正直少し嬉しかった。護衛は要らない、と言っていたことが心残り。

海斗と大牙がクルス王の前で右膝をついた。王に敬意を表している。

「そう堅苦しいのはいい。依頼内容は聞いているかい？」

「王女の護衛と、国を守る……ですよね？表向きは」

クルス王は頷く。いきなりミアアがクルス王の肩を揺すった。

「パパ。護衛ってこの二人？」

「ああ、それは海斗がするんだ。俺はサポートに回るから」

大牙が恐れ多くも口を挟んだ。ミアアは嬉しそうにはにかんだ。

「……だそうだ。ミアア、後で海斗くんを部屋に案内させるからと

りあえず戻りなさい」

「わかった！」

ミアが海斗と大牙の後ろの扉から部屋を出ていった。

「とりあえず、現状の説明から。最近は何物からの攻撃も少なくてな。市民は安心して。だが、悪魔の涙の封印を施せる人数を集めるのに手間取ってるんだ」

海斗には悪魔の涙を封印するのに必要な人員は知らされていない。この依頼が終わるのにいつまでかかるかはわからなかった。

「封印が終わるまで一ヶ月はかからないと思う。人数もあと少しだな。それまでは臨機応変に頼む」

結局、魔物が来たなら退治する。ミアの護衛をするという単純な依頼だと理解した。

「では失礼します」

一礼して立ち上がる。クルス王の側近が海斗をミアの部屋に連れていくことになった。

「俺は遊んでくるから。闘いになった時、そこで。用があった時でも呼んでくれていいぜ」

と、言い残してどこかに消えた。多分、ナンパだと思う。

海斗はそれから謁見の間から歩いて二分の部屋の前まで歩かされた。

目の前にある部屋がミアの部屋らしい。海斗はノックして扉を開いた。

「海斗だあ！」

扉のすぐ近くで待機していたミアは海斗に飛びついた。

「ミアって王女様だったんだね。知らなかったよ」

「苗字はクルスって言ったよ？ほとんどの人は知ってると思ったし」

ミアは身体を離れた。海斗が扉を閉めた。

「俺が護衛につくけど、問題ある？」

「ないよ？知らない人だったら嫌だけど、海斗は一応知り合いだもんね」

知り合ったの少し前じゃん、とは言葉にしなかった。護衛と言っても、一日中ついているわけではない。

個人の時間もちゃんとある。

「ミア、面倒なことが起きたらこの部屋か、クルスタワーの頂上に行つて。その二カ所をまず捜すから」

あくまでも緊急事態の時だ。クルス王国がどうなるかは海斗にもわからない。

「わかった。じゃあちよつと城下街に行こう！」

「え？ちよつと……」

海斗の手を扉を開いて走り出した。城門にいる門兵が驚いた様子でこちらを見ていた。

「いいのか！？これ！」

「いいのいいのー」

海斗の抑止を振り切り、城下街を歩き始めた。ため息をし、空を見た。

大きな翼を羽ばたかせながらクルス王国を旋回している大きな鳥が飛んでいた。翼を広げる姿はだいたい三メートルはありそうだ。

「何だろ……でかい鳥」

太陽の光が眩しく、目を少し閉じた。

「海斗？どうしたの？」

「何でもないよ」

顔をすぐミリアに向けて首を振った。

飛んでいた鳥は城の屋上に降りていった。

侵入者

城の屋上で大きな鳥は周りを見渡した。黒い、カラスにしては大きすぎた。

翼を広げ、身体に巻き付けた。黒い竜巻が回転してるよう。

「ふう、こっちのが動きやすくていいぜ」

人間に翼が生えた姿。翼が黒く、悪魔のようにも見えた。

「狙いのもんがこの真下つてらしいし、ぶっこわしゃあいんだが……」

腕を組み、目を閉じて考えた。

「ツヴァイとドライはまだだしのんびり行くか」

黒い翼を持った悪魔が城内に侵入した。

「何だお前！」

「死ねよ」

兵士の心臓を右腕で一突き。引き抜き、腕についた血を舐めた。明らかに異常だ。

「ショータイムだ」

城の中で不吉な笑い声が響いた。

予感

数分ごとに海斗の財布からお金が減っていく。そのつどため息をつきながら財布な視線を落とした。

「食べるなどと言わないけどさ。もうちょっと抑えない？」

ミーアは饅頭を両手に持ち、一つを口にくわえている。おいしそうに食べるから気分は良かった。

「ほんはお金ははった？」

「飲み込んでから喋りなよ」

数回噛み、飲み込んでからもう一度言った。

「そんなにお金かった？」

「それなりにね」

本当のところ、まだまだ余裕がある。遠慮してほしいのが本音だった。

護衛だがミーアの財布になった覚えはなかった。

それから数分後、大牙が壁から壁へと跳び移りながら海斗を捜していた。

市民から歓喜の声を浴びながら、汗をかいて捜した。

「いた。海斗！」

見つけると海斗の目の前に飛び降り、息を整えた。海斗は嫌な予感が頭を過ぎった。

「東西にある皆が魔物の大群の襲撃を受けてるらしい。統率のとれた……な」

「統率？誰かが指揮してるってこと？ありえない」

「とりあえず加勢に行かないとまずい！」

海斗は右手を強く握った。血が出そうな力強さで。ミアにクルスタワーに行っておくように頼み、海斗と大牙は東へ動いた。

西には他の仲間が数人向かっていると大牙から聞いた。

「クルス王国の中に入れるわけにはいかない。片っ端から消していくよ」

魔力を足に込めて身体能力を向上させ、砦に急いだ。大牙もそれに続く。

到着した時、魔物の臭いより人間の死臭の方が強かった。明らかに数負けしている。

「どこから来たよ？こいつら」

「どどこでもいいよ。やるよ」

砦にある防壁の上で二人は大剣を構えた。上から銃を撃っていた兵士たちに遠くの魔物を撃つように指示し、魔物の大群の中に身を投じた。

魔物と違い、一発でも急所に喰らえば致命的な傷を負う。スリルの中、大牙と海斗は大剣で命を奪い続けた。

「数が多すぎる！」

海斗は愚痴をこぼしながら大剣に魔力を流した。緑色の光を放った。

「風牙！」

大剣を振ると衝撃波が発生し、複数の魔物を切断した。

指輪を大剣に変化させ、二本目にも魔力を込める。

「大牙！跳べ！」

大牙は頭上に跳び上がった。海斗は目で確認し、その場で回転を始めた。

衝撃波がいくつも発生し、魔物が次々と絶命していく。

何度か繰り返すと魔物は四分の一まで数が減っていた。

「海斗！後は俺がやるから西に行け！」

「頼んだ！」

大剣をしまい、クルス王国の中を突っ切る。途中であることに気づいた。

「非常事態なのに何で皆外にいる？」

普通ならば兵士が避難させるか家に居させるはずだった。にもかかわらず、市民は外を歩き回っている。

クルス王にも魔物が攻めてきているという話は回っているはず。

「海斗！」

声に振り向くと同じギルドのメンバーが近づいてきた。

「樹里！君も来てたの！？」

海斗は樹里という女の子に信頼をおいていた。大牙と同じくらい。

「うん。今から西の砦に向かうところ」

海斗は口許に手を当てた。頷いてから樹里の肩に置く。

「西が終わったらすぐ城に来て。嫌な予感がする」

「わかった。じゃあ仕事終わったらまた……ね？」

「たまにはゆっくりするのもいいね」

樹里はくすつと笑った。いつも大牙と一緒にいることを知っている。

苦勞してそんな海斗に隠れて想いを寄せていた。

今の目標は大牙のポジションを奪い、海斗の隣にいることだ。

そんなことはいざ知らず、樹里を見送ってから海斗は城に向かった。

偽物

城門から城下街まで階段がある。長いとは言えないが、下からは門兵の位置が確認できなかった。

海斗は家の屋根に飛び乗り、城門前まで一気に跳んだ。

空中で門を眺めてから絶句した。

「嫌な予感は的中したわけだ」

二人の門兵の頭に穴が開いていた。血の臭い鼻に届く。

海斗は城内に突入し、辺りを見渡した。生きている人間はいない。

壁にもたれ掛かる人、首が胴から離れた人もいる。兵士の槍が心臓に突き刺さっている人も。

確実に何者かが侵入している。

海斗は謁見の間に急いだ。国を統治するクルス王がまだ生きているとすればそこにいる確率が一番高いからだ。

謁見の間の扉に兵士がもたれ掛かっていた。当然の如く絶命している。

「クルス王！」

扉を勢いよく開き、中の様子を見た。人間に似た姿をした何者かが

クルス王の首に鋭い爪を添えていた。

「んだよ。煩いな。静かにしないと殺すぞ?」

肌が黒く、耳が尖っている。額についた第三の目が人間ではない、と海斗に思わせた。

「王様、俺はさ、あれの居場所を吐けば命は助けるって言うてるんだぜ?」

(あれ……? 悪魔の涙か?)

クルス王は何も言わず首を横に振った。その瞬間、うつすらと笑った悪魔がクルス王の右腕をちぎった。

「あつあああああつ!!」

痛みに耐え切れずにその場でのたうちまわるクルス王。悪魔がちぎった右腕を放り捨て、クルス王の背中を踏み付けた。

「次は頭を潰すぜ? 三秒待ってやる」

海斗は扉の近くで動けずにいた。動けば確実にクルス王は殺される。

「さ、ん」

クルス王を踏み付ける足に力が入る。もがくことさえ許さなかった。

「に、ん、ん」

「わかった！言う！」

クルス王は汗をダラダラと流しながら痛みを耐え、左腕で身体を起こした。右腕からは血が止まらない。

まだ止血すれば間に合うかもしれない。魔法で傷口を凍らせたり、焼けば血は止まる。

「はあはあ……この城の……真下にある」

悪魔は急に顔色を変え、クルス王の右足を切断した。そして首を掴み、顔を近付けた。

「カモフラージュのつもりか？偽物なのはわかってんだよ。その偽物の死体は地下に転がってる。だから俺様がわざわざ拷問しに来てるの。どこに隠した？」

クルス王は唾を呑んだ。

「い〜ち」

「クルスタワーの地下」

それを遠くから聞いた海斗の顔が真っ青になった。あそこにはミリアがいるはずだったから。

「遅いんだよば〜か」

クルス王の首が飛んだ。悪魔は海斗の方に首を向け、快感に浸っていた。

「人間を殺すのは最高だぜえ。お前はてこずりそうだから後でじっくりねっとり相手してやるよ」

手についた血を舐め、翼を広げて窓から飛び出した。羽ばたかせ、クルスタワーに向かう悪魔を海斗は追い掛けた。

アイン

ほぼ同時刻、ミアはクルスタワーの屋上で空を眺めていた。

何もすることがなく、ほうけていたのだ。

「海斗……大丈夫かなあ」

神に祈るような性格ではなかった。少し心配して、時間が経つのを待つばかり。

クルスタワーの屋上は静かで落ち着く場所だとミアは感じていた。前からそつだ。

嫌なことがあった時はいつもここに来ていた。

「どうしましたか？お嬢さん」

振り向くと声の主は壁の陰から姿を現した。精悍な男性。直感からミアは少し後ずさった。

「友達待ってるんです」

「君もかい？僕も同士を待ってるんだ」

「同士……ですか？」

「うん。人間じゃないし」

「え?……」

黒い翼を羽ばたかせた悪魔がクルスタワーの屋上に舞い降りた。

腕には血がつき、臭いが漂っている。

「おい、あれはこの地下だよ。今から行くからどっかに避ける」

悪魔は男に話しかけて腕についた血を舐めた。

「それよりアイン。君はその男の相手をしてなよ」

クルスタワーの屋上にたどり着いた海斗が大剣を構えてミアの近くに立っていた。

「ミア、すぐに逃げるんだ。でも、城にはまだ行かないで。後で探すから」

「パパは?」

海斗は何も言わなかった。そしてアインと呼ばれた悪魔を睨みつける。

「話は後。早く!」

何も話してくれない海斗に腹が立ったが緊迫した状況にあることは理解できていた。

ミアは扉からクルスタワーの中に入り、階段を駆け降りていく。

「僕も巻き込まれる前に行こうかな」

ズボンのポケットに腕を突っ込む、扉からゆっくりと降りていった。

海斗はその男が気になったが、今は感知してられない。

アインの強さはまだわかっていない。油断は死に繋がる。

「しっかり守れよ。早々に終わっちまったらつまんないから……さあ！」

アインは右手をにぎりしめ、大剣を殴り付けた。海斗を吹き飛ばし、クルスタワーの屋上から落とした。

海斗は魔力で身体を強化し、知らない家の屋根に着地した。

「もっと抵抗しろ！さあさあさあ！」

アインが屋根のコンクリートを殴ると割れ目が入った。

「時間がないんだ！」

大剣で一閃、かわされたが遠心力で回し蹴りを放った。

「おっと」

回し蹴りもかわされ、舌打ち。大剣を突き刺すつもりで刃を立てた。

「さっさと消えろ！」

焦っていた。ギルドの仲間は皆、城の地下に悪魔の涙があると思っている。

クルスタワーに来る仲間はまずいないと考えるべきだ。そしてさっきここにいた男。

アインの姿を見ても全く恐怖していなかった。まごうことなく人間だった。

「闘いだけに集中しろ！じゃないとつまんねえだろうが！」

鋭い爪が海斗の身体に切り傷を増やしていく。海斗は後ろに跳び、右腕に魔力を込めた。

「風牙」

指を真っすぐ伸ばし、アインに衝撃波を繰り出す。

アインの右足の股を衝撃波がスパンツと音を立てて切り裂いた。

足を切断するには浅過ぎる。人間の血とは違い、緑の液体が股の傷から流れ出た。

「それだ！もっと来い！もっと俺を楽しませろやああああ！！」

「何だよ！こいつ！」

苦虫かみつぶしたような顔をしながら海斗は距離を取った。

（樹里と大牙は大丈夫だよな……）

敵にアインのような強さを持ったやつがいるのは厄介だった。

今回の依頼、クルス王国の防衛はギルドマスターが信頼をおいている数人が担当している。

アインのような敵が複数いた場合、手が回らなくなる可能性が出て来る。海斗はそれが気になってしょうがなかった。

ツヴァイ

「まさか魔物に言葉を話せるやつがいるとは思わなかったぜ」

大牙が砦の上で大剣を構え、黒い片翼で空を飛ぶ悪魔に声をかけた。

「それはちょっと違うね。僕は魔物じゃなくて魔人。名前はツヴァイ」

片手に黒い剣を携え、空中で一定の高さを保ちながら名乗った。

「ツヴァイね。カツコイイ名前じゃん。俺は平山大牙だ！」

ツヴァイに突撃し、斬撃を繰り返す。ツヴァイは避けずに受け止めた。

「僕はこんな温厚そうな性格だけど、頭が冴えてるわけじゃないんだ。どちらかと言えばパワータイプ」

腕に力を込め、大牙を地面に散らばった魔物の死骸の中にたたき落とした。

立ち上がる大牙の身体から悪臭がぷんぷん。

「臭いぞ……」

「大牙君、臭いから邪魔しないでよ」

鼻を摘んでツヴァイが一步後ろに下がった。

「お前のせいだろ！」

「やだなあ。力負けした大牙君のせいでしょう？」

馬鹿にするようにツヴァイは苦笑する。それが大牙の怒りを募らせていく。

「僕の仕事は、この砦を落とすことなの。終わったら魔物もどこかに行かせるんだよ？大牙君が邪魔しなければすぐ終わったのに」

(ホントにな。つーか、何で東の砦に俺しか居ないわけ？)

東の砦には大牙以外のギルド員はいなかった。魔物と砦にいた兵士たちが倒れていく中、誰も魔法を使っていないところを見ると、いないのはほぼ確実だった。

「ツヴァイ。聞いてもいいか？」

温厚な性格のツヴァイなら話を聞いてくれるかもしれない。

駄目だったら身体に倒して、死に際に聞けばいい。

「ここに来て、何人殺した？」

「魔法使う人を二人。大牙君みたいに強くなかったから瞬殺だったよ」

首を傾げ、大牙を見る。どうして？、と聞いたそうな顔をしていた。

「うちのギルドってさ、`ウィザード`って名前なんだ。で、仲間殺した奴は重罪なんだよ。ま、組織ってやつは大き過ぎて名前の知らないのもいるけど」

言葉を区切り、息を多く吸い込み、出した。大剣を持つ右手に力が入る。

「だから俺がお前を処刑する……ツヴァイ！」

処刑

大牙の目つきが一瞬で変わった。遊ぼうなどという気持ちは微塵もない。

大剣を地面に突き刺し、両手を合わせる。魔力を込めると赤い光が両手を包み込む。

合せていた両手を離していく。離れた間から赤い剣が形成せれていく。

「ベルジユ」

そう言葉を発し、左手に赤い剣を持った。`ベルジユ`それがこの赤い剣の名前だった。

右手には地面に突き刺した大剣を携えツヴァイを睨みつける。

「それが奥の手ですか？まさかそんな剣で僕を処刑するつもりですか？」

「だと言ったら？」

「僕を馬鹿にするのは程々にした方がいいと思いますね」

嘲笑うかのようにツヴァイは大牙を見て笑った。意にも介さず、大牙はツヴァイに攻撃を仕掛けるべく、地面を蹴った。

空中をわずかに飛んでいる魔物を足場にし、ベルジユで斬りかかる。

ツヴァイの持っていた剣を真っ二つに斬り裂き、片翼しかない翼を斬り落とす。

「かつ！！！！」

ツヴァイの腹を蹴り、空中を飛んでいた魔物に着地する。ベルジュを消し、地面に垂直降下していくツヴァイを見届けた。

地面に着地し、緑色の血が地面に常に流れ落ちる。ツヴァイは気にもせずに大牙を見上げた。

「何故攻撃を続けない？僕はまだ戦える！」

「いんや、もう終わりだよ」

「馬鹿にしてるのか！ふざけるな！」

「ほれ、見えるなら見てみ？」

大牙が指を指した方向に振り向くが何も見えない。

「違う、お前の背中だよ」

ベルジュが斬った切り口から発火が始まっていた。痛みで痛覚が麻痺してるのか、そのことの全く気付かなかったツヴァイは既に遅かった。

背中まで炎が回り、体が燃え尽きるのも時間の問題。

大牙は足場に使っていた魔物の首を切り落とし、地面に飛び降りた。

「ああ、そういうことね」

観念したようにツヴァイはため息をつき、大牙を見た。自分の死を諦めたように大牙には見えた。

「何か聞きたいことはあるかい？」

「どうせ悪魔の涙が狙いなんだろう？」

魔物はツヴァイの邪魔をしないように避けて皆に攻撃を繰り返していく。必然的に近くにいた大牙にも攻撃はない。

「その通り」

「じゃあ、魔人の人数と……魔人がどうやって生まれてきたか」

「ここにいるのは僕を含めた三人。他に何人いるかなんて知らない。魔人は魔王が保険に作った上位種の悪魔だよ」

「十分だ」

大牙は大剣を持ち上げ、ツヴァイの身体を真っ二つに斬り裂いた。

一息つき、魔物の群れを排除しに向かった。

ドライ

西の砦に樹里はいた。死神が持つような黒い大きな鎌を両手で持ちながら一品の魔人を見据えていた。

「俺ってばチヨーついてる！」

「はい？」

ガッツポーズをとる、その理由は樹里には理解出来なかった。

「だって相手がそこら辺のダサイ男だけじゃないんだぜ？お前、俺たちのペットになれよ」

魔人が指差したのは樹里本人だ。数人のウィザードの魔法使いと無数の兵士を無視し、樹里のみに話しかけた。

「お前の相手は俺たちだ！」

ウィザードの二人が魔人に切り掛かる。魔人の目はその二人に見向きもせず、樹里を見詰めていた。

「無視すんじゃねえよ！」

「うるさいなあ。俺たちの邪魔すんなよ」

魔人の黒い片翼が魔人に巻き付き、何かに吸い込まれるように消えた。

次の瞬間、魔人は通り過ぎたウィザードの二人の後ろに現れた。

「お前ら二人は見物してな」

魔人の右手から黒い鞭のような物が伸びた。二人が振り向く寸前に両足の腱に鞭を巻き付けた。

巻き付いた部分が赤く燃え上がり、腱を焼いて行く。

「あゝあゝあゝっ！！」

悲鳴が兵士の耳にも届き、誰かが最初に逃げた。その場にいるのが怖くなったのがわかる。

その一人に続いて全員が逃げ出した。

「腰抜けが多いな。まあ、あいつらは後で殺しとくか」

鞭を消し、逃げた兵士を見下す。残ったウィザードは樹里ともう一人。

女の子で足が震えていた。魔人の近くで悶える仲間のように自分もなるのではないか？

そついう恐怖心が足を震えさせた。

「御主人になる俺つちの名前はドライだ。お前は生きてまま捕獲して調教して、俺つち好みのペットにする」

「悪いけど、そんな趣味ないから！それに海斗以外の男に興味ない

し？」

今どこかにいる海斗に向けてこの気持ちが届くように両手を合わせ一瞬間う。

「光縛」

同時にそう呟いた。ドライの足元から白い鎖が現れ、ドライ本人に巻き付いた。

「ちよっ！待て！」

「待たない。気持ち悪いもん」

黒い大鎌でドライの首を刈り取った。指をぱちん、と鳴らす。

白い鎖がドライの胴体を締め付け、ばらばらの肉片に変えた。

緑色の血が周りに垂れ、臭い臭いが広がる。樹里は一目散にその場から離れた。

「海斗はどこかなあ」

とりあえず、海斗に言われた城に向かうことにした。

もっ少し

何かクルスタワータワーの壁に身体がめり込んだ。

「かはっ!!」

海斗だ。壁から身体を剥がし、地面まで落ちていく。

持っていたはずの大剣はどこかに弾かれたままで拾う暇がない。

「お前、人間のくせにしぶといな」

「褒め言葉として受け取っとくよ」

「褒めてねえよ!!」

空中から見下していたアインが海斗に向かって降下を開始した。海斗の指輪が双銃に変化し、一撃目を防いだ。

アインの鳩尾に右手の銃の銃口を突きつけた。

「アイスバレット」

銃が青い光を放つと同時に、青い弾丸がアインの身体に風穴を開けた。

「つつ!! つてえなあ!!」

アインは一步も足を引かず、海斗の首を掴み、身体を浮かせた。海

斗は苦しそうにあがくこともせず、銃口をアインの額に突きつけた。

「……アイシスキャノン」

さっきの青い弾丸とは違った。青いレーザーが銃口から発射され、アインの頭を打ち抜いた。

「えっ……」

淡い声が海斗の耳に届く。首を掴んでいたアインの腕から力が一瞬で抜かれ、海斗は開放された。

「ごほっ！…ごほっ！……ふう」

海斗も身体から力を抜き、深呼吸。見下すようにアインを上から眺める。

すでに息絶えていた。安心し、海斗はアインの胸に手を当てた。

「風砕」

アインの体内を衝撃波が駆け巡る。アインの身体がぼこぼこ体内から攻撃を受け、粉碎した。

「海斗！」

戦闘を終えた樹里が海斗を発見した。城に向かう最中を通りがかったのがわかる。

「樹里。無事だね。あ、頼みがあるんだ」

「海斗の頼みならどんなことでも！」

「じゃあ、ミアを探して城に連れてって。先に言っと、城にいる人間は全員死んでる」

「えっ!？」

はきはきしていた樹里の身体が一瞬で止まった。海斗は樹里の肩に手を置いた。

「頼んだよ。この戦いはもう終わる」

そう言い残して海斗はクルスタワーの中に突入した。

「クルス王も死んだってこと……だよな？」

戦いが終わっても混乱はおさまるのか、樹里は気がかりだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5764j/>

天まで届く

2011年10月6日17時22分発行